エーデルワイス

合唱団通信

4/14

久しぶりに書いています。今回は先日行われました練養会について書いてみました。まず最初に、

子安 啓吾

空は厚っていた。曇りの朝らしい雲が、鉛色に空をおおっていた。

午前8時25分。家を出た。社会教育センターまで徒歩で水曜会をたどって行く事にする。傘のカバンが右手に重い。口をついて出るのは「なごりのって」の一節だ。

センターの横で、説明の見かけ、軽トラックの運転席から声をかけてきた。弟を送ってきたと言う。「がんばってな」別れ際の言葉が、耳に重い。本番だ、本番だ、と頭の中に反響する。

視聴覚音楽室は掃除中だった。掃除婦の人が、みなさん図書室の方ですよ、と教えてくれる。いってみるとすでに数人の女の子がにぎやかに話をしている。サラリーマン風の中年男性達は席をとって喧騒の支配する部屋を出てゆく。誰の表情も堅い。うれすがりのする空気の中で、無造作に並べられている図書の配置の意味を考えてみたりする。

落ち着かない、落ち着かない、どうも落ち着かない。

午前9時20分。掃除が終わり、練習が始まった。喉がいがらっぽい、声が自分に戻ってゆく。男部形に並んだ一行の揃のソプラノ、アルトの誰も彼もが、妙に緊張的に見えてくる。理性が眠り、内感が強くせりあがっているらしい。

練習半ば、雨が降り出す。6月4日の合唱祭の日にも降っていた空は鉛色を深める。「なごり色の雨はくだけて」と歌が胸裏を走っていく。

午前11時25分。練習終了。一階ロビーで昼食を摂りはじめる。雨はまだ降っている。40人近い男性が騒がしい分だけ、足元にポッカリと口があいているようだ。

午前11時50分。雨中、やっとタクシーを見つけて乗りこむ。雨で濡れかけばだって行く。車窓のガラスが人いきれで、くもっていく。

青少年会館ホールには一番のりだった。千百人収容できると言うホールは意外に小さい。舞台には青色光が投じられている。新緑樹の緑が鮮やかと輝やいている。一体どれほどの人数をこの夢幻に呼びこめるのか。南国では一億名のある合唱祭を母体とするとは言え、合唱祭は産声を始めたばかりだ。練度の良し悪しと重大さが、それ以上に客のつりは莫迦だ。開場まで一時間半ほど。緞帳を舞台裏から出して並べ終わると、練度感が肩の上に重くなってゆく。あちこちの走り回り伝いに足を運ぶ。でもせわしない人の客席の発する興奮に引っぱられて、知らずしらずのうちに込みそうだ。

女性が着換えてきた。ワインカラーのスカートと白のブラウスは落ちついた目をいた。同じ様な老もしても一人一人工夫を凝らしている。だが、目を楽しませている時間はない。この慌いの現われたすぐ後には本番が訪れる。10mと離れていない最前列の客の顔が判別が解くだろう。知った人物もあるに違いない。本番まで一時間半はあっている。練度は3時間後には終わっている。その時とは、ホールが合唱祭と改名された直後は明らかになっている。やがて客席が暗くなった。40人の団員の中で練習しながら、自分の声しか耳にはいらず、孤独の感はいよいよ深まる。口にこそ出さないが誰もが感じているようだ。喉元を和ネクタイがしめあげている。ワイトが眼につきさえり、竹むちの様な顔になる。

緊張で生あくびが出た。足がガクガクする。風呂に誰もいない様に感じ、同時にあらゆる視線が集まっている様にも思える。

やがて緞帳が降りた。練習も終わり、開場のアナウンスがはいる。舞台袖の隙を窓から見ていると、客はポツリ、ポツリやってくる。合唱祭が何か珍らしい事でも起きるのか、という顔付きで座っている。何人来るだろう。思い当たる知人をどんどん連絡してみても、一人の知人など、たれも知れていない。半数にも満たない客席と相手に喧嘩をすると、どんな感情がするだろう。

生あくびが、また出た。もう、客席のガラリ具合を見る気にもならない。何も彼も取り出して捨てたい気分だ。頭はまだ残っている様だ。とざされた舞台の中で、腕時計もなく、時間の経過も喪失しかけていた。団員は落着いしていた。その向う側に何が潜んでいるのか、と舞台からも客席からも緞帳に視線を放っている。最後の注意がされている。口を大きく開けるように、肩の力を抜くように。舞台なれした人の顔からは何も読みとれない。スボンのポケットには先程拾った輪ゴムがはいっている。

客席からそんな物見える訳がないのに、指先ずにいられなかった。

意識が本番です、と小声で合図をする。誰かがガッツポーズをすると、みんなが堅い笑顔でうなずいた。

アナウンスがはいった。

つづいて緞帳のすこがれた裏地の向うに薄暗い客席が、足元の方から振かっていった。

練度長が続いてもう「ずい分ちがうもの」だ。でも、つい昨日のことみたいな気もしたりして。

練度長前までは練習、練習で疲のあまり伝いもしなかったんじゃないかな。『もう合唱祭なんてやめなさい』といい出さない様に、あまりの声をうめあわせるつもりでしっかりお手伝いして下さい。

女子の人達は涙!

では次回は感想報告と

技術委員長からの長い長〜い

Xッセージを送ります

では: ばいば〜い